

『コロラトゥーラの女王』エディタ・グルベローヴァが日本での引退を表明

中東生

2012年09月21日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ



40年以上もオペラ界でトップを走り続けてきたエディタ・グルベローヴァは、今秋ウィーン国立歌劇場と共に来日し、ドニゼッティのオペラ『アンナ・ボレーナ』のヒロインを歌う予定だ。ところが、これが日本での最後の舞台になると宣言したため、彼女が引退を考えているのではないかという憶測が飛び交い、音楽界は騒然としている。

旧チェコスロヴァキアのラチャ村で1946年に生まれたグルベローヴァは今年66歳で、引退してもおかしくない年齢だが、デビュー当時とほぼ変わらないレパートリーを完璧に歌い続けており、ファンは驚きを隠せない。

グルベローヴァと言えば、「彼女以外のツェルビネッタでは『ナクソス島のアリアドネ』は振れない」と世界の巨匠指揮者カール・ベームに言わしめるほど卓越した表現者である。

彼女が得意とするのはコロラトゥーラと呼ばれる歌唱で、速いフレーズの中に、コロレ（カラー）を施すための装飾音やトリルを多用し、「真珠の玉が転がるように」軽快に音階を上下する。若く瑞々しい声に適している超絶技巧なのだが、それを40年間保ち続けてきた彼女は奇跡的な存在だ。生まれ持った声の柔軟性の上に並ならぬ努力で培われた技術の賜物である。

実際グルベローヴァと話をしていると、世界的有名なオペラ歌手というよりは、世界に通用する職人といった印象を受ける。メディア嫌いで、媚びた態度や強引さを極端に嫌う。舞台の上で自分の全てを観客に捧げているので、それ以外の時間は誰にも邪魔されたくないと言う。神様から与えられた声を守るのが義務だと心得ていて、調子の悪い時は実の娘とさえも筆談をしたというエピソードは語り草である。その頑とも言える生き様は、数々の困難を乗り越えて来た証であろう。

ドイツ人の父とスロヴァキア育ちのハンガリー人の母の間に、一人娘として生まれた彼女の幼少時代は、病弱で貧乏だったが、物心ついた頃から歌を歌ってばかりいたという。12歳の時に放送児童合唱団のオーディションに合格してから音楽への道を歩み出し、ブラティスラヴァ音楽院在学中の1968年に同地の歌劇場でロッシーニ作曲『セヴィリアの理髪師』のヒロイン役でデビューする。

しかし、彼女のキャリアには困難がつきまとった。それは彼女の、真っ直ぐでへつらうことを嫌う性格が共産主義体制と相容れなかったことと無関係ではない。実際、彼女の父親は戦後、ドイツに強制送還されるのを免れるためスロヴァキア籍を取得したが、共産主義とぶつかり、投獄されてしまう。釈放された後は、妻と娘にさえ恐れられるような精神的不具者となってしまった、とグルベローヴァは回想する。

彼女はその後ウィーンに亡命するが、ウィーン国立歌劇場専属歌手になっ

た後も苦労は続いた。しかし、その下積み時代が、どんな共演者とも合せられる柔軟性を培い、楽曲のスタイルと役柄の解釈、技術面ばかりに重点が置かれるコロラトゥーラの世界の中で、その装飾音にまで感情を与える彼女独自のスタイルを確立させた。

その後、伝説的指揮者カール・ベームに見出され、スター街道を突き進むのだが、何度打たれても起き上がり、困難を芸術の糧にして40年以上戦って来たその生き方は、類い稀な声楽家としてだけでなく、一人の人間として敬意を表したくなる。

今回日本で上演される『アンナ・ボレーナ』は、『マリア・ステュアルダ』、『ロベルト・デヴリュウ』と並ぶドニゼッティのテューダー朝女王三部作である。グルベローヴァは、三部作の中で一番最後にこのアンナ役に挑戦したのだが（1992年、バルセロナのリセオ劇場）、この役はグルベローヴァにとっては音が低く、三人の女王の中で一番難しい役だったと思われる。初役（初めてその役を歌うこと）から20年を経た今年、最も成熟した彼女の声を、彼女にとって常に特別な存在だった日本の聴衆の耳に永遠に残すためにこのオペラを選んだのではないだろうか。

グルベローヴァはまだ正式な引退宣言をしていない。しかし2015年からのスケジュールを意識的に空白にしているという。ヨーロッパでは演奏会形式のオペラに出演することが多い彼女だが、1985年から居を構えている地元のチューリヒ歌劇場では来日前に『ロベルト・デヴリュウ』が、そして、彼女が「人生最後の新しいオペラ」として選んだベッリーニ作曲の『異邦人』が、来年の6月から7月にかけて上演される予定だ。どちらも既に完売に近い状態だという。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.